

【巻頭言】

養護教諭として未来を読む

今野 洋子
北翔大学

2022年はコロナ禍3年目を迎え、ロシアによるウクライナ侵攻、日本の前首相の暗殺、相次ぐ北朝鮮からのミサイル発射、急激な円安など、これまでにないような激動の1年だったといえる。

激動の1年が終わろうとした暮れのある日、懐かしいひとりの教え子からの手紙があった。

大学卒業後に一般就職をし、養護教諭の道から遠ざかっていたものの、卒業後4年以上を経て、やはり養護教諭になりたいとの思いが消えず、悔いのないよう採用検査に挑戦し、養護教諭となった経験をもつ卒業生である。養護教諭になりたい思いは強かったものの、それまでの社会人としての生活と異なる毎日に不安ととまどいでいっぱいだったという。さらに町内の研究推進者としての役割を担うことになり、不安はさらに大きなものとなった。しかし、町内の養護教諭とともに協力しながら研究を進めるうちに、「子どもたちに必要なものは何か。子どもたちのために養護教諭として何をすべきか」を深く考え、「もっともっと学ばなければ!」という意欲が不安を超えるようになった。さらに、私からの研究への助言が指針となり、学ぶ姿勢を忘れず、がんばりたいという、ほんとうにうれしい手紙であった。

先が見通せない時代だからこそ、「養護教諭は何をすべきか」を改めて心に刻むべきであろう。

養護教諭が「子どもたちのために養護教諭として何をすべきか」を考えると、子どもの成長を見据えて考えることから、養護教諭として未来を読むことになる。

当然のことであるが、何もしないときは、何も起きない。しかし、自分が何もしなくても、世の中は動き変化し続けている。望まない事態も起き、対応が必要になる。そこでやっと動き出して対処に乗り出す。その繰り返しで時が経ってはいないだろうか。これでは、養護教諭として不十分である。

養護教諭として未来を読み、子どものために養護教諭としてすべきことを追究し、学び続けてほしい。激動の時代に、改めて願う。